



私たちのことを私たち抜きで決めないで (Nothing About us without us)

園長 野中 泉

2006年のことですが、国際連合（国連）で「障害者の権利に関する条約」（「障害者権利条約」）が採択されました。日本でも、2014年1月に同条約を批准（条約に書かれていることを守ると、国として約束すること）しています。この条約の策定には、世界中の障害のある人たちが参画したのですが、その時の合い言葉が「Nothing About us without us（私たちのことを私たち抜きで決めないで）」でした。この合い言葉には、「障害者の権利を守る国際的な条約は必要だが、それを障害者ではない人たちだけで作るのはおかしい、障害のある人自身がその条約づくりに参画しなければならない」といった意味が込められています。

私は、アトムに来る前には福井で知的障害のあるなかま（子どもたちと大人たち）が通う施設の施設長をしていたのですが、この言葉は、私たちがなかまの日常の支援を考えると、何度もスローガンに掲げていました。たとえば何を食するか？何を着るか？もっと先に進めば、どんな仕事に就くか、どこで暮らすか。どんなに障害が重くても意思や思いがある。なかまたちが自分自身で決められるように支援する。できることは見守り、できないところは手伝う。どうしたらいいかわからないときは、親身になって、力になる。施設の職員たちと何度も繰り返し確認してきたことは、今、保育園で、小さな子どもたちに向き合う仕事においても、同じように大事なことで、ずっと思ってきました。

にもかかわらず、私は（私たち大人は）、今回の、新型コロナウイルス感染拡大の防止に関わることについては、子どもたちの声をまったく聞かずに、いろいろなことを決めていたのではないだろうか、改めてモヤモヤします。もちろん感染症対策には専門家の見解をふまえることや、国や自治体の指示に従って運営することは、とても重要で、時には一方的な決定もやむをえません。それでも、本当になにひとつ、子どもたちや親たちと一緒に考え、一緒に決めていけることはなかったのか？少なくとも、子どもたちには、もっと丁寧に説明しながら進むことはできたのではないかと。自戒の念も含めて考えずにはられません。

ご承知のとおり、6月3日厚生労働省からの「子どもたちのマスク着用は一律には求めない」という通達を受けて、アトムは夏場のマスク着用を原則なしと決めました。私はこの半年くらいの間にも、町内だけでなく他府県も含めて学校の先生や保育関係の人たちとお話する機会がたくさんありましたが、ほとんどの人が「マスクは外してやりたいですよね」と言っていました。でも、その多くが続けて「でも、保護者の理解は得られませんよね」「近所からの苦情が怖いですからね」と当たり前のように首をふることは、ずっと居心地の悪い違和感がありました。なかには「マスクをつけない苦情への言い訳と、マスクを着け続けた場合の苦情への言い訳と、どちらの言い訳がたつかで決めます」と、平気で口にする保育関係者もいて、呆れてしまうこともありました。もちろん、今の時点で完全な正解などは、どこにもないでしょう。でも、子どもたちにとって今マスクが必要か否かの議論ではなく、自分たちの決定が世間からどう見られるかの方が優先順位で上にくてしまう教育や福祉現場の混乱の方を怖いと感じます。

今年4月に、熊取町にも「子どもの権利に関する条例」（熊取町のホームページで公開されています）ができました。昨年その策定に私もオブザーバーのひとりとして関わらせてもらったのですが、その策定委員に公募で加わってくれた高校生や大学生が（実はアトムの卒園児たち！）、口をそろえて「大人たちが私たちの意見に一生懸命耳を傾けてくれて嬉しかった」と最後に感想を言ってくれたことが、心に残っています。逆に言えば、大人が子どもたちの意見に真摯に耳を傾けることが少ない世の中だと言われたようにも感じました。「子どもたちに、聞いてみたら？」これはアトムのおこちゃん（市原理事長）の口癖です。もう一度ここからはじめよう、そう強く思う夏です。